慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西堀 昭 著 『増訂版・ 日仏文化交流史の研究 : 日本の近代化フランス』
Sub Title	Akira Nishibori, L'Etude de l'Histoire des Relations culturelles franco japonaises : la France et la Modernisation du Japon
Author	池田, 真朗(Ikeda, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1989
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.62, No.6 (1989. 6) ,p.135- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19890628-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西堀　昭著

『増訂版・日仏文化交流史の研究
——日本の近代化とフランス』

一　あれは一九七八年のいつ頃のことだったろうか。私は、留学先のパリ一九区フランドル通り一三一番地の寓居に、一人の日本人学者の突然の訪問を受けた。それが、かつて手塚豊本塾名誉教授のお引き合わせでご挨拶をかわしたことのあった、本書の著者西堀昭教授であった。何度目かのフランス実地調査の機会に私のアパルトマンに立ち寄られた教授の口から、矢継ぎ早なご質問を受けて、私はその精力的なお仕事ぶりの一端に触れた感じがしたものである。

二　本書は、明治期にいわゆる御雇外国人として来日したフランス人の中で特に日本の近代化に貢献した一五人を選び、出生・結婚・死亡といった基本事項から日本での業績などを資料に忠実に明らかにした諸論考を中心にまとめられた、九〇〇頁に近い大著である。著者には既に一九八一年刊の旧著『日仏文化交流史の研究』があり、そこでは一〇人の御雇フランス人が取り上げられていたのであるが、この度はその後に出版した十数編の論文を加えて、再度世に問うたものである。後にも述べるように、本書の最大の特徴は、出生等の事項については、すべて著者がフランスで収集した、あるいはフランスから取り寄せた、現地の市役所等の記録によって確認を取り、さらには、著者の幾度にもわたる現地調査によって当該御雇フランス人の子孫等を探し出し、そこから得た資料や聞き書きによって、できうる限り詳細かつ忠実に彼らの事績を記録しようと努めているところにある。

三　本書の概要を明らかにするために、まずその構成を紹介しよう。第一章は、御雇フランス人研究の問題点と題して、「幕末・明治時代の御雇フランス人」という導入的論考を収める。本稿は実際、著者の本格的な御雇フランス人研究それ自体の出発点となったものであり（初出は昭和四九年三月の千葉商大論集一一巻三・四合併号）、既にここに後述する手塚豊博士の影響が見られる。次いで第二章・法律関係では、ボアソナード、ブスケ、アペール、ルヴォンの四人を取り上げ、さらに「明治時代におけるフランス法教授の諸学校」の論考を収める。第三章・軍事関係では、シャノアーヌ、ベルタンの二人を取り上げ、第四章・技術関係では、ヴェルニー、ルイ・フェリックス・フロラン、ヴァンサン・クレマン・フロランの三人を取り上げてさらに「横須賀製鉄所伝習生・訳官(Ⅰ)(Ⅱ)」、「横浜製鉄所の設立について」、「一八八六年の『畝傍』艦遭難事件」の三論考を収める。第五章・医学関係は、この増訂版で加えられたもので、

ポール・アメデ・リュドヴィック・サヴァチエを取り上げる。第六章・教育関係も、増訂版で新規に入れられたものを含め、メルメーカション、フーク、アリヴェ、エック、デュリーの五人が取り上げられ、さらに「横浜フランス語学所」「日本におけるフランス語研究」、「村上英俊（1811-1890）とフランス語研究」、「明治時代のフランス語学校（Ⅰ）～（Ⅳ）」、「フランス語研究書目」の五編の論考が収められている。そして付録として、日仏文化交流年表が掲載されている。なお、巻頭にはブスケらの子孫からのメッセージが、巻末にはボアソナードら六人についての詳細な家系図が付されている。

四　著者の御雇フランス人研究は、昭和四八年に書かれた「横浜フランス語学所」（本書第六章所収）において、フランス語教師メルメーカションに興味を抱いたことから始まっている。当時の著者の研究の主眼は、著者本来の専門のフランス語・フランス文学からする、わが国における初期のフランス学あるいはフランス語教育の歴史の解明にあったようである。そこから著者は徐々に法律その他の関係の御雇フランス人に研究対象を広げていったわけであるが（この点については、著者が当時教鞭を取っておられた千葉商科大学にたまたま手塚博士（当時本塾教授）も非常勤講師として出講しておられ、そこでの博士との交流が大きく影響しているようである）、そのような経緯もあってか、流石に第六章の教育関係は、頁数からいっても本書の約半分を占め、特に記述が充実している感がある。しかし評者は、第三章以下については専門外のためその評価が手に余ることもあり、ここでは、本書のもう一つの柱である、第二章までの法律関係について主に紹介・論評したい。

五　個別的な紹介に入る前に、本書の総括的な評価について一、二述べて置きたい。その第一は、本書において一貫して採用されている方法論の優れていることである。本書を一読して感じ取れるのは、著者の、徹底した一次資料の探索と、その資料を資料としてあるがままに語らしめる態度である。この点については、著者が法律関係の御雇フランス人に考察の対象を向けた点とあわせて、手塚豊博士のご助言が大きく影響しているように思われる。前掲の昭和四九年の導入的論文「幕末・明治時代の御雇フランス人」は、公文録、太政類典等の法制史の専門資料を駆使したもので、文末の謝辞に著者自身も述べるごとく、手塚博士の示唆の大きいことが窺われる。しかし著者に最も敬意を表すべきは、そのような資料の探究・選択という法制史学上のノウハウに止まらず、それら資料の処理・評価という面についてまで、推断と過信を避けて正確・緻密に処理するという手塚博士の方法を忠実に学び取ろうとしている点であろう。既にここにおいて、著者の論考は、語学・文学専攻者の仕事ではなく、史学者のそれとなったといってよいと思われる。ともかくも、著者にとっては、明治法制史の泰斗手塚博士という助言者を得たことが最大の幸福ではなかったか。

そして本書のもう一つの優れた点は、本書が完全に外を向い

た、御雇外国人研究であるということである。要するに、かつての御雇外国人研究は、その多くが日本国内にある資料を用いてするもので、その視点が国内に限られ、研究として限界のあることが否めなかったのに対し、本書は、この文章の最初にも紹介したように、著者の語学力と旺盛な探究心を生かし、フランス本土に渡っての資料探索を十分に行っている。このようなフィールド・ワークを行える御雇外国人研究者は、未だに著者の他にはそう何人もいない。本書が類書に対して存在意義をうたえる最大の点はそこにあろう。

六　以下法律関係の論考について、いくつか個別的に紹介・論評しよう。まずボアソナードについては、周知のようにすでに名古屋大学の大久保泰甫教授の詳細な研究が、フランス本土での調査に基づいて行われているため、著者の仕事はそれを後追いしている部分が多くなっているのは仕方のないところである。しかしながら、大久保教授がその所在までは明らかにしておられない資料の所在を明記されている部分もあり、また五〇頁の「ボアソナード・フォンタラビー博士関係地図」や六七頁以下のボアソナードの年譜は詳細で便宜であり、利用価値も高い。特にパリの国立文書館のボアソナード関係資料の整理番号や問い合わせ先の担当者名までを付記している点は、後学のための有難い心遣いといえる。

さらにブスケとアペールについては、これまでこれほどにフランス本国での資料を駆使した研究はなく、特に両者の子孫を探し出し、多くの新資料を発見したことは、著者の一大功績というべきである。ブスケについては、その著作『日本見聞記』（"Le Japon de nos jours" 野田良之、久野桂一郎訳）によっても、なかなかの文学的センスが窺われるのであるが、ブスケが少年時代より詩作に親しみ、一六歳のときにはその一つの作品をヴィクトル・ユゴーに献じ、賞賛の返信をもらっていたこと（本書一〇七頁以下）などは、遺族に会って初めて明らかになるエピソードであり、かつそれが単なるエピソードに止まらず、ブスケのロマンチストでかつ愛国的な情熱家である人柄を理解するのに役立つことに価値がある（ブスケはフランスに帰国後、コンセイユ・デタから大蔵省に転じ、さらにブルガリアに一〇年赴任して、その後第一次世界大戦にも、七〇歳という高齢にもかかわらず主任主計官として出征している。本書一〇四～一〇五頁参照）。

さらにアペールについては、古く織田万の追悼文「我が司法界の恩人」（東京朝日新聞昭和九年六月二二日～二七日）があり、さらに手塚豊「司法省御雇外人教師アッペールの司法省法学校卒業式演説」（法学研究四一巻二号）等の研究・紹介はあったものの、年譜まで付けた包括的なアペール研究としては、本論考が初めてのものであるといってよい。帰国後に彼が発表した論文等（その中には日本古代法に関するものがいくつかある）についてまで、詳細に調べ上げた労作である。なお、本論考の初出は、手塚豊教授退職記念論文集『明治法制史・政治史の諸問題』慶應通信刊・昭和五二年（題名は「ジョルジュ・ヴィクトル・アペールについ

て）である。

最後にミッシェル・ルヴォンであるが、この人は明治二六年から明治三六年にかけて東京帝国大学法科大学教師兼司法省名誉法律顧問であった人で、和仏法律学校教頭も勤め、ボアソナードの後継者とも目される人である。また一方で彼は在任中に日本文化研究に傾倒し、帰国後はパリ大学文学部で日本歴史・日本文明を講じ（一九三七年、七〇歳でパリ大学教授を退職）、いわば今日の日本学の創始者ともいうべき地歩を築いた、日仏文化交流史上の重要な人物であるが、法学史の上では、外人教師としても法律顧問としても、ボアソナードらが一通りの役割を果たした後の来日であったためもあって、優秀であったわりには最近まで全くと言ってよいほど研究がなされていなかった。著者の本論考（初出は『近代日本史の新研究』昭和五六年一〇月）が出るまでは、文学面からの研究論文が一つあったにすぎない（畠中敏郎「ミッシェル・ルヴォンと『日本文芸抄』」大阪外国語大学学報第二号、昭和三八年三月）。この人物に脚光を当てた本論考は、いささか資料的要素が勝ちすぎているとはいえ、高く評価されるべきであろう。なお、近年法政大学ボアソナード記念現代法研究所の委託研究として、島本昌一「和仏法律学校教頭ミシェル・ルヴォン」（「法政」一九八五年六月号）が出たが、これまたルヴォンの著作等も丹念に検討した大変優れた研究ではあるものの、四年前に公刊されていた本論考を比照・引用されていない点がいかにも惜しい。読者には本論考と島本論文を合わせ読まれれば、ルヴォンについてのかなり正確・詳細なイメージを摑むことができよう。

なお、第二章・法律関係に加えられたもう一つの論考「明治時代におけるフランス法教育の諸学校」は、いわゆる五大（ないしは九大）法律学校などの研究の陰に埋もれた、中小の私塾のような法律学校の歴史を、その教員やカリキュラム等の資料を示して伝えるもので、当時のフランス法教育の裾野を知ることができるという点で興味深い。

以上本書は、この法律関係のみを取ってみても、明治法制史研究の基礎資料を提供する貴重な業績ということができる。

七　本書を通読して感じるのは、本書に収められた著者の一連の仕事が、フランス語でいう A quoi ça sert? を問わない、得難い仕事であるということである。子孫を尋ね歩いて新資料の発掘につとめることはともかくも、出生証書を写し、埋葬関係書類を閲覧し、家系図を作るという作業になると、「それが文化交流史研究のために何になる」という批判が出てくるかもしれない。しかしそれは結果の提示を急ぐ短絡的な学問をする人の批判であって、適切ではなかろう。資料というものは、思いがけないところで生きるものである。ここまで詳細な資料を資料としてひたすら提示する虚心の仕事があってこそ、この仕事を利用し、この仕事の恩恵に浴する人々が様々な専門分野から生まれるのである。本書はその意味で、高く評価され、かつ敬意を払われるべき業績であることを疑わない。

ただ、さらに望蜀を述べれば、本書にはまだ収録されていない中にも、研究されるべき御雇フランス人は数多い、たとえば法律関係でも、ロベール・リップマン、ジュール・ジュスランなどが挙げられる（ジュスランについては、評者もかつて手塚博士のご指導のもとに小稿を草したが―「司法省御雇外人ジュール・ジュスラン」法学研究四八巻四号―、それきりになって、かつその後他にも研究は出ていないようである）。著者にはさらに研究の対象を広げられ、できれば本書をなお増補されて、御雇フランス人研究に不可欠の文献としての地位を確立させていただきたいと思うものである。

八　とまれ本書は、代表的な御雇フランス人の研究を通じて、幕末・明治期の広範な分野における日仏文化交流史の一側面を伝えるものであると同時に、フランスとフランス人にとりつかれた一人の学者の魂の旅路の記録でもある。本書の客観的な評価の高かるべきことは右に述べた通りであるが、その詳細な記述の端々に、著者の執念にも似た資料探索の努力が窺われ、しかもその並み外れた執念の探索を、著者が楽しみながら行っているようにさえ感じられてくる。個人的な感想を付け加えれば、おそらくこの大著の神髄は、ライフワークを得た至福を感じつつ、パリを、アンチーブを、ロシュフォールをさまよう、一人の学者の面影を髣髴とさせるところにあるのではなかろうか。

（一九八八年五月刊、駿河台出版社）

池田　真朗